

「マーケットの浅読み・深読み」

発行・編集:FXニュースレター

執筆担当:斎藤登美夫



◆◆◆ No.0666 ◆◆◆

21/12/15

【 干支やラッキーカラー参考に、来年の相場を考える 】

巷間では「来年のことを言えば鬼が笑う」—とされるが、今年も残り半月。さすがに来年のことをアレコレ取り沙汰しても、もう笑われるタイミングではないだろう。そこで今回の当レターでは「来年の相場見通し」についてレポートしてみたい。ただし、テクニカルや政治・経済情勢など材料に基づいたものは次回以降改めてレポートするとして、今回は干支やラッキーカラーなどを参考に「緩め」の視点で指摘してみる。

<< 干支は「壬寅」、陰陽五行説で考える >>

まず、来年の干支はというと、十干が「壬(みずのえ)」で十二支は「寅(とら)」。つまり、「壬寅」になる。

陰陽五行説によると、「壬」は十干の9番目にあたり、「次の生命を育む準備の時期を表している」という。また、その意味するところは「静寂」や「停滞」とされ、それからすると来年の金融相場は全般的に「辛抱」を強いられる一年になるかもしれない。まだ始まってもないうちから厳しいことになりそうなので、ひとつだけフォローしておく、そうした動きは「次に向けたエネルギー蓄積」と考えられる。「明けない夜はない」—と考え、物事には積極的に取り組みたいものだ。

一方、十二支である「寅」は始まりから3番目にあたるもので、「誕生」や「始まり」を表すとされている。そうした意味では前述した「壬」に近いニュアンスだが、もう少し積極的かつ明るい内容になりそう。たとえば「成長」や「豊穰」といった内容も含まれるという。いずれにしても、そんな来年の「壬寅」という干支から考えられることは、来2022年は「冬から春に向けての転換期」にあたることになるのかもしれない。依然として新型コロナの感染拡大が続いていることもあり、金融市場ももうしばらくは「停滞」といった状況をたどる可能性を否定できないものの、さすがに来年末に向けてはアクティブな動意を示すなど、その後に向けた明るい展望が開けることになるのではなかろうか。

<< 過去の「寅年」経験則 >>

来年の寅年の相場格言はというと、「寅は千里を走る」—とされている。そこから転じて、「株価は上昇する」とされるものの、実は調べてみるとむしろ下がったケースの方が多いことがわかった。つまり、相場格言はあまりアテにできないようだ。それに対して為替はというと、モデルケースが少なく断定はできないのだが、こちらはなかなかの大相場が多い気がするうえ、何故かそのすべてが「ドル安・円高」へと動いていることはもっと気掛かりのように思っている。

さらに、前回の「寅年」である2010年には「ギリシャを中心とした欧州債務危機」、前々回1998年は「リーマンショック」、1986年は「チェルノブイリ原発事故」、1974年「ウォーターゲート事件でニクソン米大統領辞任」—などの重大事象が起こっていたことも参考までに念頭に置きたいところだ。

<< 来年のラッキーカラーは「黄色」あるいは「山吹色」!? >>

風水の専門家によると、来年のラッキーカラーは、ゴールドあるいは黄色・山吹色、そしてクリーム系(アイボリーやベージュ含む)になるという。前述したように、来年の十二支は「寅」であり、そのボディカラーが基本的にはラッキーカラーにあたると思って間違いないさそう。また、紫やワインレッドをラッキーカラーに挙げている向きも少なくない。

なお、そんなラッキーカラーから見た、来年有望な金融市場は引き続きゴールドを中心とした貴金属、そして若干変化球だが原油や天然ガスといった「土」に関するものも吉だという。当たるも八卦当たらぬも八卦ながら、困ったときの神頼みで頭の片隅にでもとどめておいて損はない気もしないではない。(了)



当レターは、情報提供のみを目的としたものです。内容に関して正確であるよう注意を払っておりますが、その正確性を保証することはできません。投資や運用にあたっての最終的な判断は、あくまで読者自身の責任と判断によって、ご利用いただくようお願い申し上げます。また、本稿の無断転載・転送もご遠慮ください。

なお、本稿に関する問い合わせは『FXニュースレター』までお願い致します。

